

学会行事のオンライン開催の利点と課題



栗原 誠

昨年度は、学会の多くの会議や行事が、新型コロナウイルス感染症対策のためにオンライン開催になったと同時に、オンライン開催とどうかの検討の中で学会とその行事の使命や役割について考えさせられた年度でした。特に若手研究者にとっての学会の魅力という面でオンライン開催はどうだったのでしょうか。

私の所属する中部支部では、昨年度は新型コロナウイルス感染症対策のため4月の常任幹事会を皮切りに、中部支部主催の会議や講演会等は、延期となった中部支部夏期セミナーを除きすべてオンライン開催となりました。いずれも初の試みであり、開催できたのは各担当者のご尽力によるものでした。さらに、昨年9月に中部支部での開催となった第69年会も年会史上初のオンライン開催となりました。この大きな大会をオンラインで開催し、さらに複数の会場で行われた発表のシステム運営を外部委託なしに実行委員会単独実施で成功できたのは、大谷実行委員長はじめ中部支部を中心とした実行委員会の皆様のご尽力によるものでした。

これらの経験を通して、会議や行事のオンライン開催のメリットや、今後につながる様々な新たな可能性が感じられ、得られたノウハウを今後活用することで会議や講演会の効率化を進められることが分かりました。今年度も、この原稿を書いている時点では新型コロナウイルス感染症の収束が未だ見通しが立っていないこともあり、中部支部の会議やいくつかの行事はオンライン開催の予定になっていますし、さらにコロナ後においてもオンライン開催が選択肢として活用されるでしょう。

その一方で、オンライン開催における人と人との交流のあり方には可能性と同時に、検討すべき課題のあることも強く感じられました。

第69年会ではオンライン交流会が開催され、私も参加しましたがオンラインでも楽しく魅力的な交流が行われたと言えます。また、中部支部における学生や若手の交流の場である高山フォーラムでは、オンラインにより学生等若手による堂々とした研究発表と若手同士の交流が行われ、延期や中止にせずRemoによるポスター中心のオンラインで開催したことで今後に繋がる成功を納めました。

しかしながら、人と人との交流は、対面でのイベントでは当然もっと多層的です。研究発表後の休憩時間に熱心に質問を受けたり、廊下で久しぶりの友人にめぐり会ったり、会場の隅で小声で研究に関する有意義なアドバイスを受けたりといったことは誰にも経験があると思いますが、人と人とのつながりを強めると思います。特に学生や若手研究者にとって、こうした交流がむしろ記憶に残り研究の楽しさややりがいを感じさせてくれます。そしてそれが学会行事の魅力ではないのでしょうか。オンライン開催のイベントでは小声での打ち合わせも実質的に困難で、多くの場合発表者以外の参加者の顔も見えず、多層的な交流は難しいのが現実です。また、今の若い人たちはオンライン世代であると同時に、オンラインの怖さも知っていて、オンラインでの発言に慎重な面もあります。イベントとしては成功した昨年度のオンライン行事でしたが、それが昨年度の学生や若手にとって学会の魅力が減るものになっていないことを期待すると同時に、今後もまだしばらく続くオンライン開催においても人と人とのつながりを深められる交流を可能にする工夫が必要と感じています。

〔Makoto KURIHARA, 静岡大学教育学部, 日本分析化学会中部支部支部長〕